

キュウリ褐斑病

1 病原菌の特徴

- (1) キュウリ褐斑病は、糸状菌(カビ)に起因し、近年増加傾向にある難防除病害で、抵抗性の弱い品種やブルームレス台木の普及が本病多発の主要因と考えられています。
- (2) 病原菌は、高温多湿を好み、メロン、スイカ、カボチャなどウリ科作物全般に病原性を示しますが、キュウリ以外には自然条件での多発事例はありません。
- (3) 本病の第一次伝染源は被害茎葉や病原菌の付着した各種農業資材などで、前年の発生ほ場では再び発病をみる確率が高くなります。初発生後の二次発病は病斑上に形成される分生孢子によって起こり、近隣株にまん延していきます。

2 被害の様子

- (1) 主として葉に発生しますが、多発時には茎、葉柄に紡錘形、淡褐色の病斑を形成したり、幼果が花弁を通じて感染し、黄変としなびを起こすこともあります。
- (2) 葉では初め黄褐色の円形小斑点(写真1)を生じ、のち径1cm内外、ときには径2~3cmに拡大し、類円形あるいは不整形で淡褐色ないし灰褐色、同心円紋を有する大型病斑(写真2)になります。発病は下葉から起こり、順次上位葉へ伝染しますが、とくに栽培後期に病勢が急速に進展し、早期枯れ上がりによって著しい減収を招きます。
- (3) 施設栽培における類似病害にはべと病、灰色かび病、つる枯病、斑点細菌病の葉身部発病が挙げられますが、病斑の形状、色調および標徴(カビ、小黑点、細菌粘液の溢出など)により識別できます。なお、露地栽培では炭そ病と発生時期や病徴が酷似するため、病原菌の確認が必要です。



写真1 葉に発生した小型病斑



写真2 葉に発生した大型病斑

3 発生について

- (1) 発病には 25~28℃の高温と多湿条件が適しています。
- (2) 高温期に換気不良、灌水過多、畦間灌水などハウス内の湿度を高めるような管理をしたり、曇雨天が続いた場合にまん延しやすくなります。
- (3) 収穫中~後期、株の過繁茂が引き金になって病勢が急速に進展する 경우가少なくありません。
- (4) 窒素偏重の施肥条件、または生育後半に肥料切れを起こしているほ場で被害が激化する傾向にあります。
- (5) 本病は育苗時にも発生しますが、施設における通常の発病時期は、促成・半促成栽培で4月以降、収穫終了時まで、抑制栽培では収穫初期から11月頃までです。また、露地栽培では梅雨後期からの発生が一般的です(図1)。

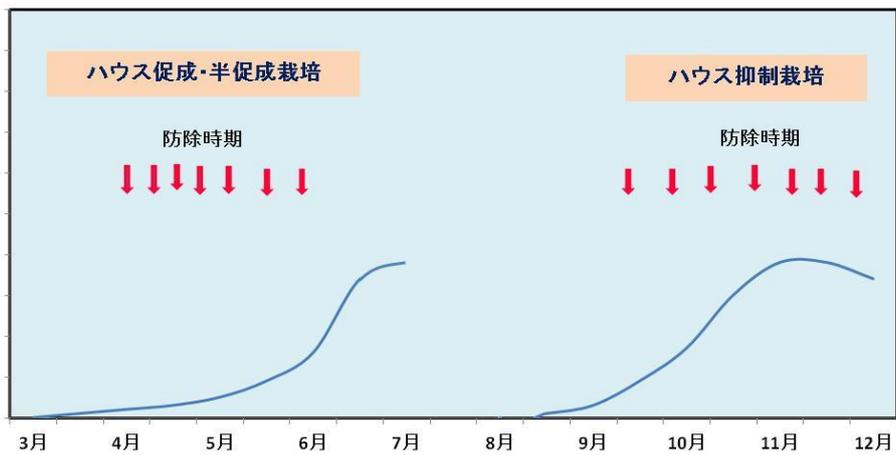


図1 キュウリ褐斑病の発消長

4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除

- ア 発病が認められたほ場の資材は十分に水洗するか、消毒してから使用しましょう。
- イ 促成、半促成栽培では作付終了後、夏期晴天日にハウスを2～3日間密閉し、蒸し込み処理を行うと病原菌の密度低下に効果があると推定されます。
- ウ 窒素過多を控えるとともに、肥切れを起こさないような肥培管理も大切です。
- エ 施設栽培では換気を十分にいき、灌水過多にならないようにして高温多湿を避けましょう。
- オ 老化葉は早めに摘除して通風を図り、また、初発生期の病葉は生育に支障のない範囲で速やかに取り除きます。
- カ 栽培終了後の被害茎葉残さは必ずほ場外に持ち出して処分します。

(2) 薬剤防除

- ア 本病は高温多湿下での病勢進展が早く、発生が目立ってからでは手がつけられなくなり、いずれの薬剤も十分な効果が期待できません。前作において発病がみられたほ場では、発病前からの予防散布を原則とします。
- イ 散布間隔はおよそ10日、散布量は10a当たり200リットル程度を標準とし、発病しはじめたら散布間隔を短縮するとともに散布量も多めに設定します。また、薬剤の散布むらは効果低減の大きな要因ですから、葉の表裏全体によくかかるように散布します。
- ウ ベと病、灰色かび病、つる枯病など常発しやすい他の病害との同時防除を心がけましょう。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005



彩の国埼玉県